

# 山口市における産公学連携によるアートがある街の創造 — 「アグリ・アート・ツーリズム」の実践的研究 —

Creation of Yamaguchi City with Arts and Fashion  
based on Industry-Public-University cooperation  
- a case study of activity, 'Agri-arts-tourism' -

研究代表 水谷由美子\*

神大樹\*\*, 磯部素男・片山涼子・永留靖洋\*\*\*

Representative study : Yumiko Mizutani

Taiju Kami, Motoo Isobe, Ryouko Katayama, Yasuhiro Nagadome

This thesis is based on trying to think about the present conditions and possibility about the creation of the town where are arts and fashion by the Industry-Public-University in Yamaguchi-city. Y. Mizutani, a representative study made a plan of a project called Agri-arts-tourism. And finally this project has been administered and supported by the committee, Museum Town Yamaguchi 2007 to where her study team has joined, that has been carried out from August to September 2007.

This project aimed at the creation of the creative town which could let a city and a rural district fuse by installing art and the fashion which got an idea from farm products in the shopping district. I aimed also at the direct communication of a producer and the consumer at the same time.

キーワード：産公学連携事業 アートがある街の創造 ファッション 農業文化  
山口市 アグリ・アート・ツーリズム 生産者と消費者の直接交流

Keywords: activity based on Industry-Public-University, creation of city with arts and fashion, fashion, culture of agriculture, Agri-arts-tourism, communication of a producer and the consumer

## 1. はじめに

研究代表である水谷は1993年から山口市を中心に地域の産公学連携による研究創作活動を継続し、服飾文化を中心に地域創造に関わる創作活動を実施してきた。特に、1995年から2005年までは「サビエルと大内文化」をテーマとして、作品創作を行い、テーマに沿った地域の名所旧跡などを舞台としてファッションショーを実施してきた。また2006年度には、山口が日本史に重要な足跡を残した明治維新に着目した。以上では地域の文化や歴史資源を開発し、創造・発信をすることから、地域でのネットワークが生まれ、また次なる創造の基盤が醸成されてきた。

以上のような経験によって生み出された産公学連携を基盤に、今年度から「スロー・ライフ」をテーマにファッションを通して提案する研究を始めた。ここでは地域の自然的資源に着目する結果、農業文化への関心を持った。研究プロセスにおいて、第1回山口県総合芸術文化祭ミュージアム・タウン・ヤマグチ2007「HEART2007」(以下HEART2007という。)<sup>1)</sup>に参加する機会に恵まれた。水谷は所属大学の学部編成の結果新たに生まれた文化創造学科の学科長をしていることから、企画委員会の委員長に推薦され着任することになった。同時に新生の文化創造学科の1年生がHEART2007のスタッフとして地域に貢献することが期待された。

産公学の代表からなる企画委員会で水谷は、商店街のアーケード街を舞台にして、都市と田園が融合するファッションとアートの祭典として、「アグリ・アート・ツーリズム」の企画を提案した。他の委員の共感を得て、この提案は大学と地域そして商店街が共同で実施する事業として採用された。HEART2007は展・商・遊・録・映というキーワードに分かれた企画が立てられ、アグリ・アート・ツーリズムは「遊」のカテゴリーの「アート・ルート

\* 山口県立大学大学院国際文化学研究所 教授  
\*\* 山口県立大学大学院国際文化学研究所 2年  
\*\*\* 山口県立大学大学院国際文化学研究所 1年

一の坂」<sup>ii)</sup>のイベントの一つとして実施されることになった。

水谷はこの企画の総合プロデューサーとして、ワークショップ、商品開発、本番の展覧会などすべての企画・運営の責任者を務めた。

このプロジェクトではアートを見ながら巡って歩く回遊空間としての商店街の魅力を高めることから、新しい山口中心商店街の魅力創りに貢献しようと考えた。水谷は1995年から山口市のアーケード街を劇場空間に見立てて、ファッションショーを実施して来た。その中で作品展も同時開催して来たが、今回は従来のもをはるかに超える規模の企画となった。

産公学連携という実行委員会が作られて運営されることになったのだが、特に大学と行政（山口県教育委員会から山口県文化振興課に所管換えとなった山口県立美術館）が共同で実施する事業という側面もあり、「アグリ・アート・ツーリズム」の企画は、平成19年度文化庁文化庁芸術文化課地域文化振興室が実施している「文化芸術による創造のまち」支援事業の支援を受けることにもなった。

以下では当研究グループ<sup>iii)</sup>が、2007年6月～9月までの間に実施したこのプロジェクトの計画からワークショップ運営そして9月9日の本番におけるアーケードでのブース設置による展覧会までを記述しながら、山口市における産公学によるアートがある街の創造についてその現状と可能性について考えてみる。

ここで当研究グループの実践的研究の役割分担を記しておきたい。まず、ワークショップの運営は磯部素男と永留靖洋が担当し、ワークショップの講師と布で作る創作野菜のプロトタイプ制作を片山涼子が担当した。そして、商品開発としてのもんペヌーヴォーは片山涼子がデザインし、神大樹はアグリ・ファミリーの図柄をデザインしてスタッフTシャツを開発した。神と片山は山口県立大学発ベンチャー企業、有限会社ナルナセバのそれぞれ代表取締役および取締役を務めており、このプロジェクトで商品開発の部門でも参加した。以下の内容はそれぞれの担当者が記述したものを、研究代表者が編集しまとめたものである。

## 2. アグリ・アート・ツーリズムの計画

「アグリ・アート・ツーリズム」のコピーは、アグリカルチャー agricultureのアグリとアートから創った造語である。農業は一般に第1次産業で文化としての側面があまり感じられない分野だという認識がある。しかし、農家の人々には実際には科学的な実験や研究の背景を駆使する一方で、創意工夫や手業によって、野菜や果物そして花などの農作物の形や味を日々創造しているのである。

結果としてのそれらの農作物は花のみならず食物になるものでも、形や色などがそのままの状態であらわれる対象でもある。それ故に、農業において、もの作りに光を当てるとアートとしての側面が浮かび上がって来る。アグリ・アートという言葉は一方では農業がアートであるという側面を意味している。他方では農作物などをテーマとして創作されるアート作品を指す言葉でもある。日常生活では健康や安全という視点から農作物を見ることが多いが、農作物は実は以上のように文化として愛でられる対象あるいは創作される対象としても存在しているのである。

山口は街の中で蛍が見られるように、都市生活の中に自然がくい込んでいるような特徴がある。また、都市部からほんのわずかな時間で、自然の山川や田園に行くことが可能な場所である。それ故に、大都市では味わえない都市と田園の融合が日常生活の中で体験できる土地柄を生かすことが、より山口らしさやオリジナリティを表現する方法ではないかと考える。

農業文化を取り上げる企画は全国でもあまり見られないので、結果としてアグリ・アート・ツーリズムは斬新さとユニークさで話題性が高まり、メディア的な関心と呼ぶ可能性も期待できると判断された。

具体的には自然の野菜と布で創作された野菜、もんぺやその他の農作業着から着想を得た衣服、そして美術作品などの展示を中心商店街にて行い、街に遊びに来た人たちが巡って歩き、表現者と市民とのコミュニケーションを図ることが可能な「アグリ・アート・ツーリズム」という企画を立てた。

アグリ・ツーリズムはイタリアから始まったライフスタイルで、都市と田園の交流が目指されたものである。都市の人々が農家の家に滞在し、その土地で採れた野菜や食品などをその土地らしい料理法で調理されたものを食べるのが特徴である。水谷のアイデアは、街を舞台として都市と田園が交流するために、本来の意味とは逆に都市に田園が入り込み、そこで農作物を作った人と消費者あるいは鑑賞者とが出会い、コミュニケーションして、互い

のことを理解し合い、また野菜への新たな認識を持つ機会とすることを目指そうと考えたものである。

同時に、アグリ・アート・ツーリズムのツーリズムという言葉は、一般市民の方が農作物を作品と見立てて各ブースを巡って歩くことによって、街歩きの楽しさを喚起しようという意図で付けた言葉である。

主な会場となる米屋町商店街は8つの商店街によって構成されている山口市中心商店街の中で、もっとも交通量が多い通りであり、集客において有利である。アーケードに、180cmの立方体が4つ組み合わせられたダンボール製のブース10セットが、一列に配置され全長約90mの空間が、さながら街中の美術館になる計画である。

この中で、地元仁保地区の朝採れ野菜、全農山口が出品する県内特産野菜とワークショップで作った創作野菜を空間で分けたり、同居させたりして展示して販売する計画である。

また、アグリ・ファッションを10体展示するとともに、もんぺから着想を得た新しい仕事着あるいは街着である「もんぺヌーヴォー」(有限会社ナルナセバによりプロデュースされたもの)を展示し、販売することにした。また、スタッフTシャツを開発することになり、果物や野菜にキャラクター性を持たせて、アグリ・ファミリーの図柄が提案され、スタッフが着用するとともに現地で販売も計画される。

さらに、山科君代氏の野菜や果物を対象に描いた作品の拡大された図版をブースの外側に大きく展示するという計画が美術館から提案された。山科氏は長年、山口県美術展で何度も受賞し、2007年度も優秀賞を受賞された作家である。毎年、自分の家で育てられた野菜や果物などを描いて、上記展覧会のコンペに参加している。そうしたことから今回、ブースの壁面装飾の作家として抜擢された。

その他に、農作物に関する情報コーナーの設置、阿東町のりんごの展示と即売も予定された。

### 3. 「HEART2007」実施の背景

ここで改めて「HEART2007」が開催される背景を記し、アグリ・アート・ツーリズムの全体の中での位置づけを明らかにしておく。

山口県総合芸術文化祭の前身である山口県民文化祭は、県民の文化活動への参加と文化交流を促進し、個性と魅力ある県民文化の創造を目的として1997年に始まった。その県民文化祭において、昨年開催された第21回国民文化祭やまぐち2006の成果を継承するとともにリニューアルして、2007年から新たにスタートしたのが山口県総合芸術文化祭である。

山口県総合芸術文化祭がこれまでの県民文化祭と比較して大きく異なるのは、文化祭を純粋に芸術文化の創造や振興といったところに位置づけるだけでなく、地域づくりに芸術文化を活用するというまちづくりの視点が加わったという点である。

HEART2007は山口県立美術館が中心となり、美術館から一の坂川、中心商店街へとイベントの場が広がり、また地域の芸術家などと連携し、日頃は文化に触れる機会の少ない人たちにも日常的に文化(アート)に出会う機会を作ろうとした点で画期的なイベントであった。

「1. はじめに」ですでに述べたように、山口県立大学国際文化学部文化創造学科はHEART2007の主催者のひとつとして実行委員会に加わったが、実行委員会の中心となる山口県立美術館がさまざまな企画を出していく中で、山口県立大学は独自の視点を加えたイベント「アグリ・アート・ツーリズム」を企画した。

アグリ・アート・ツーリズムでは、山口の魅力イベントに盛り込むために、山口の豊かな自然に着目した。山口では自然がHEART2007の会場となる中心商店街と隣り合わせで存在している。この特性を生かして、自然を商店街に持ち込むという発想に至った。自然の中でも特に農業に着目した点が、今回の大きな視点である。従来、農業は文化的活動と結びつけて考えられることはなかった。主に、経済活動としてとらえられて来た農業と文化的な活動とを融合させることによって、新しい農業への眼差しが向けられるきっかけを作ることが可能となる。さらに、自然とアートに同時に触れることができる体験を通して、スローなライフスタイルを提案することにした。

当初、会場である中心商店街において新鮮野菜の展示・販売、そしてフェルトや布で野菜のアート作品を制作する企画になっていたが、当日1日だけのイベントでは、多くの市民の方に参加してもらうことが困難であり、また展示する作品の数も限られるために、9月9日の商店街において行うイベントを本番として設定し、その本番に向けてワークショップを開催することになった。

#### 4. ワークショップについて

##### (1) 「布で野菜を作ろう」

ワークショップの企画が7月になって決まったことから、開催時期が8月に限定され、日程的に参加者を募るのは非常に困難であった。幸いにも昨年山口市で開催された国民文化祭やまぐち2006「ファッションフェスティバル」において、同様の企画に参加した経験のある市内の子供会や老人クラブなどがあり話を持ちかけた。

その結果、仁保地区子供会、大歳地区子供会、大歳地区の手芸クラブの有志、大内地区老人クラブの婦人部、山口市シルバー人材センターなどから無事に参加協力を得ることができた。実施期間の8月は夏休みであり、また企画から実施まで期間が短時間であるにもかかわらず、それぞれの組織における代表者からの支援を受け、多くの参加者を得ることができたのである。

以下、ワークショップの開催日程を記す。

8月9日(木)：山口市シルバー人材センター

8月11日(土)：大歳公民館ワークショップ、「羊毛で野菜を作ろう」ワークショップ

8月18日(土)：大内氷上公民館ワークショップ、大内高芝公民館ワークショップ

「羊毛で野菜を作ろう」ワークショップ

8月19日(日)：大歳公民館ワークショップ

8月23日(木)：アグリ・アート・ツアー in 仁保

8月25日(土)：「布で野菜を作ろう」ワークショップ

8月27日(月)：平川公民館ワークショップ(子供会ジュニアリーダー対象)

8月29日(水)：仁保子供会ワークショップ

8月30日(木)：大歳子供会ワークショップ

9月1日(土)：「布で野菜を作ろう」ワークショップ

以上、8月から9月初頭にかけて計13回のワークショップを開催し、延べ約200人の市民の参加を得た。しかしながら、応募期間などの制限があったため十分な広報をするまでには至らなかったことが反省点として残る。

また一方、商店街の中で開催したワークショップについては、事前に新聞や地域情報紙さらにエフエム山口での事前PRがあったにもかかわらず参加者がそれほど芳しくなかったことで、広報についての重要性や難しさを認識した。結果的に参加者から「参加して良かった」との意見をもらったとしても、参加者が少なければ十分な成果が上ったとはいえない。とにかく、敷居が高い参加型ワークショップにおいていかにして多くの人に参加してもらうかが重要であり、今回のようにこれまでにあまり見られないような内容のワークショップでは、日程や簡単な内容を広報するだけでは市民の関心を惹きつけるだけの魅力や楽しさを伝えるのに十分でないことがわかった。

結果として、商店街以外で実施したワークショップが口コミという伝達手段で広報して巧を奏したことは、今後の企画の教訓ともなった。

次にワークショップのなかで、今回のイベントの多くの協力を得た仁保地区において開催した「アグリ・アート・ツアー in 仁保」について記述しておく。

##### (2) アグリ・アート・ツアー in 仁保

このワークショップでは、市内で有数の農産地である仁保地区を訪ね、畑で作られた状態の果物や野菜を観察し、またもぎたての農産物を食して、土とともにある本物の農産物の姿を知ることが目的とした。そして、見学後には市による野菜づくりをすることで、体験から得た気持ちや自発的な動機によって野菜の造形をするというワークショップを計画した。

当日の日程は以下のとおりである。

日時：8月23日(木)

場所：山口市仁保(道の駅ほか)

タイム・スケジュール

12:30 山口県立大学集合・出発

13:00 仁保畑見学・野菜試食(ぶどう, プチトマト)

14:30 ワークショップ開始

17:30 山口県立大学着・解散

アグリ・アート・ツーリズムのワークショップとして山口県立大学から大型バスを借り上げてツアーという形で開催したこのイベントは、運営スタッフを含めて約40人が参加するという、今回のワークショップの中では大掛かりなものとなった。

果物の観察と試食では、実際に仁保地区における農家の協力を得て、ぶどうとミニトマトの2種類を試食した。大人に混じって参加した子どもたちも、ビニールハウスに入って直接蔓からミニトマトをもぎとり、食べるという体験に興味を持ったようである。幅広い年齢の参加者が自然のある生活に触れることができた。

また、仁保いりどり市出荷者協議会会長の山本勤氏に今回のアグリ・アート・ツアーの企画に協力を得た。そして、ワークショップの前に依頼した講演会で、山本氏は食の安全の問題から始まり高齢化や後継者の問題などについて話した。そこで、現代日本が抱える農業の課題が山口でも同じように起こっていることを再確認させられた。農業にも「スロー・ライフ」という言葉から受ける「ゆったり」、「おだやか」、「平安」といったイメージとは違う現実があるということも改めて認識した。

このアグリ・アート・ツアーの中心的なイベントである布による野菜づくりでは、参加する小さな子ども達も針を使えるかという不安があった。しかし、当日は同伴の大人や、運営スタッフとなった文化創造学科の1年生のフォローなどにより大きな問題もなく進めることができた。

### (3) 野菜の貼り絵ONデニム

野菜制作ワークショップとは別に、市民参加形式の企画として「野菜の貼り絵ONデニム」を企画した。これは、アグリ・アート・ツーリズムのメイン会場となる米屋町商店街だけではなく、他の商店街も含め全体をアートで彩ることで、商店街をアートイベントの会場として一体感を醸成しようとしたものである。

実際には、中市商店街のアーケードの上にある広告展示用のバーに、デニム上に野菜の貼り絵をした作品を展示する計画を立てた。そこで、この企画に参加する制作者を探す必要があった。そのために、HEART2007の主催団体でもあった山口市の担当職員の協力を得て、市内10保育園に制作を打診し、快諾を得た。

具体的に作品は、縦1.5メートル横2メートルのデニムの布に、野菜をテーマに園児が自由な発想で紙などを切り貼りして作品を作るよう、各保育園に依頼した。その結果、8月からの制作開始にも関わらず、多くの保育園の参加を得て、12枚の作品ができあがった。さらに制作者側からの希望もあり、9月9日当日だけの展示ではなく、本番の約1週間前から9月末までに展示期間を延長し商店街を彩ることができた。

### (4) まとめ

近年、多くの社会的問題発生の背景には、家庭や地域のコミュニティの崩壊が原因のひとつとしてあげられる。コミュニケーションの復活の方法として学校や地域でさまざまな取り組みがなされているが、世代を超えて多くの人が参加できるものとして、今回のようなアート活動は非常に有効なものと考えられる。ワークショップのなかで参加者の方が和気藹々と創作活動をしている姿や、次々にできあがっていく作品に歓声をあげる様子を見ると、こんな小さな「ものづくり」でも、人と人をつなぎ、創造性を育てる効果があることを改めて認識した。

## 5. もんぺヌーヴォーとスタッフTシャツの商品開発

### (1) もんぺヌーヴォー

もんぺヌーヴォーはアグリ・アート・ツーリズムのスタッフウェアとして、片山涼子が開発したものである。農業から連想される「もんぺ」と、現代において日常着として定着している「ジーンズ」をミックスした「もんぺ×ジーンズ」をコンセプトに制作することにした。プロトタイプ制作後のデザイン会議で、商品として量産し販売できる可能性が出てきたため、アグリ・アート・ツーリズムの特別企画商品として開発することになった。

「もんぺヌーヴォー」は、日本の伝統的な農作業服、もんぺの要素をジーンズに取り入れることで、幅広い世代をターゲットにできる。旧式のもんぺであるもんぺ袴と、イスラム文化圏の民俗衣装であるサルエルパンツの要素

をミックスし、シルエットはトレンドを意識しつつ、ゆったりとしたはき心地を意識したデザインにした。

ヒップの部分には、大漁旗、緋、浴衣地、和柄、縞柄等をあしらい、デニムとのコンビネーションを楽しめるようなデザインにした。その組合せは16種類を考案した。サイズは大・小2パターン、大20着、小30着、合計50着生産した。商品タグもデザイン・制作した。日本的でかつ稀少な素材を使用し、付加価値のあるメイド・イン・ジャパンジーンズとして、山口の農業文化とデニム文化の両者を象徴できるような商品として開発した。

「もんペヌーヴォー」の「ヌーヴォー」とは、フランス語で「新しい」という意味で、新しいスローなライフスタイルのイメージを提案するために命名された。デザイン、プロトタイプ制作、パターン制作、仕様書制作を、有限会社ナルナセバが担当し、量産プロダクトを匠山泊に委託した。

販売場所は、道場門前商店街に仮設されたHEART SPOTと9月9日当日のブース内で販売した。また、9月9日当日には、山口県立大学大学院のスタッフがスタッフウェアとして着用した。また、ジェンベ演奏グループFollibaの衣装として提供し、その姿で演奏された。

もんペヌーヴォーを購入された方の中で実際に農業をされている方から、ヒップ部分の生地が薄いことで、通気性はあるが耐久性に欠けるという指摘を受けた。また、男性にとっては前開きがないため、トイレで困る等の指摘があった。今回は、当初がスタッフウェアとしての開発だったため、ファッション的な要素が強く、また、コストを落とすために前開き等のディテールを省くなどしたため、機能面での配慮が欠けた。今後、耐久性や前開きについて改良を行い、新たな商品としての開発をする予定である。

デザインとプロトタイプ制作をした片山は、自身のデザインした服を量産の商品として展開したことで、多くの貴重な体験をした。具体的には材料調達や工業用パターンの制作、仕様書の制作やコスト計算、価格設定など、商品開発には欠かせない工程を実践した。特に、商品としてより多くの人の手元に行き渡ることによって、ファッションショーや展示ではできない、着て感じるというデザインの伝え方を実践できたことは非常に有意義であった。

## (2) アグリTシャツ

HEART2007 アグリ・アート・ツーリズムのスタッフTシャツは、神大樹が担当した。神は大学院生であると同時に、有限会社ナルナセバの代表取締役で、後者の方に開発の依頼があった。初めの打ち合わせでは、アグリ（農業）とアートのイベントなので「野菜と果物をモチーフに」ということと、予算の関係上プリントは一色のみということが決まった。

第一案として、野菜のシルエットをそのまま切り抜いた切り絵のようなデザインと、簡略化し絵文字のようにしたデザインを制作し、色や構図を替え数パターンを提案した。その最初のデザインは、学生のスタッフの希望や意見を取り入れていたため、若者向けのデザインであった。しかし、総合プロデューサーである水谷やその他の教員、山口県立美術館の学芸員などに意見を聞き、イベントの意図を再度読み解き、子供から高齢者までイベントに来る方々を楽しませることを目的としたデザインに変更することになった。

最終的に、初めに制作した絵文字のような野菜に目や口、足などを付け、リンゴ、かぼちゃ、トマト、なす、そしてピオーネ（ぶどう）をキャラクター化し、それぞれのキャラクターによる「アグリ・ファミリー」を生み出した。図柄の色はHEART2007のイベント全体で象徴的に使用されていた赤と白を用い統一感を持たせた。

このTシャツはデザインが決定した後にイベントTシャツとして販売することになり、HEART SPOTやブースにおいて展示販売をしたほか、着用したスタッフや農家の方々がイベントを盛り上げる舞台装置のような役割を果たした。

## 6. アグリ・アート・ツーリズム（本番）の実施

### (1) 概要

日時：9月9日（日）

9：00～ スタッフ集合・説明

10：00～ 会場設営機材搬入・展示

- ・山口県立大学生制作「もんペヌーヴォー」「アグリTシャツ」
- ・「野良着」（もんぺの現在と過去）

- ・ワークショップ「布で野菜を作ろう」作品
- ・「県内産野菜20品目」「仁保の朝採れ野菜」
- ・市内の保育園児制作「野菜の貼り絵ONデニム」

11:00～ Folliba ジェンベ演奏 1 回目

13:00～ Folliba ジェンベ演奏 2 回目

15:00～ Folliba ジェンベ演奏 3 回目

16:00～ 撤収開始

場所: 山口市中心商店街

ホームページに掲載されたコピー:「商店街にアートな野菜市場が出現。野菜オブジェや県立大学生デザインによるニュータイプの農作業着を展示するほか、『朝採れ野菜』も展示即売し、『農』を素材に中心商店街をデザインします。野菜カラーに彩られた商店街をゆっくりと旅してください。」<sup>iv)</sup>

## (2) 内容

HEART2007は8月18日から始まり、商店街の中のギャラリー&ミュージアムショップとなったHEART SPOTをはじめ、街中において様々なワークショップやイベントが展開され、アグリ・アート・ツーリズムはこの最終日に開催された。

スタッフはこれまでに山口市内の子供会や老人会でワークショップを開くなどの準備を進め、みんなの気持ちも1つになった頃に迎えた当日、米屋町商店街に約90mの区間にわたり40個の販売・展示ブースが出現した。

このブースは、アグリ・アート・ツーリズムというイベント名が示しているとおり、agriculture（農業）とアートを融合させた企画で、アート（文化活動）と農業（経済活動）を絡めることで、アートの視点から農業や自然を感じてもらおうという目的があった。

ブースでは、仁保の道の駅において開催した「アグリ・ファッション」展（2007年7月）や、新しい街着として開発されたもんぺヌーヴォーとアグリTシャツ、ワークショップで制作した創作野菜の展示などを行った。またこの中に、今回のイベントに参加していただいた全農やまぐちや徳佐りんご組合、仁保いもどり市出荷者協議会、秋川牧園&ラ・フランチエスカなどの団体が、県内の特産品などを販売し、多くの来客でにぎわった。

野菜をアート作品としてとらえたことで、その空間には、楽しい市場の賑わいもあり、また街を訪れた人がアートに触れるきっかけとなる場となった。それは、正に「アートが街へ飛び出す」というキャッチコピーそのものの光景であった。

## 7. まとめ

今回のイベントでは、どのような経済活動にもアートの要素があり、それをうまく活用することでこれまでとは違ったイメージや新しいものが生まれる可能性を感じた。たとえばアートの視点から農作物を扱ったり、新しいもんぺファッションを発信することで、農業に対する一般的な印象である泥臭いイメージが払拭された。

新鮮な地採りの野菜を味わう、見る対象として愛でるという行為によって、多くの市民が農業文化の存在を知る機会となったと言える。当日は、仁保いもどり市出荷者協議会会長の山本勤氏が自ら販売に立ったので、生産者つまり作り手と、消費者つまり鑑賞者の直接的なコミュニケーションが生まれ、非常に有意義な時間が生まれた。

文化的交流が新しい購買層を開拓するなど、産業的な発展のきっかけを作るとともに、若者に農業への興味を喚起する機会となったはずである。これが、後継者を育てるきっかけになれば、さらに文化と産業が融合する山口ならではのイベントとなる。

以上のように、アート活動を通じた市民の交流や連携、そしてその発展が創造的な街としての山口の顔を作る基盤となる。それが文化と産業をともに活性化していく力になることを信じていたい。今回のアグリ・アート・ツーリズムはそうした意味において文化芸術を生かしたまちづくりのひとつの実験事例といえるイベントであった。

2008年1月22日刊日本農業新聞の一面にアグリ・ファッションの記事が掲載されたため、全国から多くの反響を得た。さらに地元のJAからの働きかけもあり、具体的にファッションを通して農業に新しい風を吹かせる可能性も生まれて来たことは大きな成果である。今後も継続的に創作のテーマとして行きたい。

## 謝辞

以下の皆様に、この場をお借りして心からお礼を申し上げます。

道の駅仁保の郷 仁保いろどり市出荷者協議会 有限会社ナルナセバ 匠山泊  
ブルーウエイ株式会社 山口県立大学山口文化創造研究会

## (注)

- i) 主催：ミュージアム・タウン・ヤマグチ2007実行委員会の構成メンバー：山口県立美術館  
山口市商店街連合会 山口商工会議所 山口県大学国際文化学部文化創造学科 山口県  
山口市 NPO法人こどもステーション山口
- ii) その他に「ROUTE 102 - 豆腐を食べて、小径（こみち）をつくろう」「ひもで、せんを、むすぶ - 実物大・一の坂川名所図絵 -」「アグリ・アート・ツーリズム - 羊毛で野菜をつくろう」「アグリ・アート・ツーリズム - 布で野菜をつくろう -」「ブリッジング・ランドスケープ - 景観に橋をかける -」などが8月4日から9月9日の間に実施された。
- iii) この研究における衣装制作やスタッフとして以下のメンバーも参加している。  
蒲地頼子・松本朋子（山口県立大学生活科学部環境デザイン学科水谷ゼミ4年）  
石橋昌子・田村未奈美・萩元由佳（山口県立大学生活科学部環境デザイン学科水谷ゼミ3年）  
山口県立大学国際文化学部文化創造学科1年生有志10名
- iv) アート・ルート一の坂「HEART2007」<http://www.art-museum.pref.yamaguchi.lg.jp/>  
2007年12月1日取得

写真集 I : ワークショップ



1 8月9日 シルバー人材センターにて理事長へ挨拶



5 8月25日 岡村邸 (道場門前商店街) にて



2 8月18日 高芝公民館にて



6 8月27日 子供会ジュニアリーダーのワークショップ



3 8月18日 氷上公民館にて (氷上・金成地区合同)



7 8月29日 仁保地区子供会のワークショップ



4 8月11日 大歳公民館にて



8 9月1日 HEART SPOT (商店街) にて

写真集Ⅱ：アグリ・アート・ツアー in 仁保



1 仁保のぶどう園にて



5 ワークショップの様子



2 プチトマトの観察・試食



6 ワークショップの様子



3 仁保地区の山本勤氏の講演



7 創作野菜（作品）



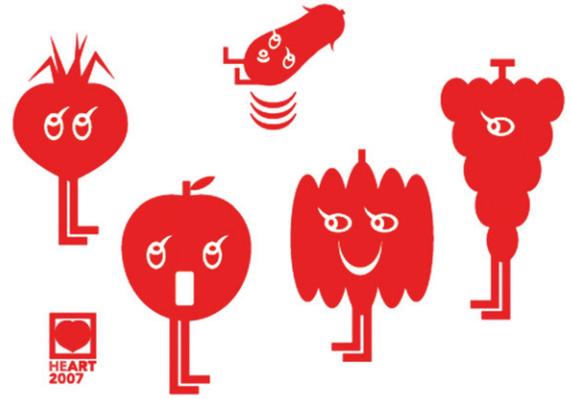
4 ワークショップの様子

アグリ・アート・ツアー in 仁保  
2007年8月23日（木）

写真集Ⅲ: 商品開発



1 もんペヌーヴォー



3 アグリ・ファミリー (Tシャツに使用)



4 アグリTシャツとして販売



2 HEART SPOTにて販売



5 9月9日アグリ・アート・ツーリズムでのTシャツの展示販売ブース

写真集Ⅳ：アグリ・アート・ツーリズム（本番）



1 山口市中心商店街（米屋町）に野菜のブース出現



2 アーテ的要素が加わると野菜の買い物もおしゃれ



3 創作野菜の展示（作品とワークショップの写真）



4 ブースに展示されたアグリファッション



5 もんペヌーヴォーの展示販売



6 県内の特産品を販売



7 Follibaによるジェンベの演奏（もんペヌーヴォー着用）

アグリ・アート・ツーリズム